



筑紫路

発行
自衛隊福岡病院
春日市小倉東1丁目
61番地
TEL 092-581-0431
ホームページ



『温故知新』と『吐故納新』



自衛隊福岡病院院長兼
春日駐屯地司令
陸将補 川口雅久

自衛隊福岡病院長を拝命し、『あるべき姿の追求』を要望しつつ、早一年が経過しました。発熱外来、入院治療、PCR検査、ワクチン職域接種、大規模接種センター支援等、新型コロナウイルス感染症に対処しつつ、従来の業務を大きく損なうことなく実施して行くことができました。これも、病院（駐屯地）職員の真摯な対応はもとより、近隣の皆様、自治体を含めた部内外諸機関等のご理解・ご協力があったからこそものと感謝申し上げます。

少し前の話になりますが、さる三月一日に当院看護学院の卒業式を実施いたしました。今回卒業した第四十五期生は、入校から卒業までの二年間のすべてをコロナ禍で過ごしました。入校中の生活・教育等、従来とは異なる点も多く、学生諸官は大変な不安・不自由があったことと思います。また、教育する側も模索しながらの二年間でした。

二年間という期間は人事異動等、組織にとって一つの節目となり得る期間であり、業務・作業等の継承という意味でも大きな意味を持ちま

す。過去の経緯から実施要領の細部に至るまで、代々継承されている事は多々ありますが、担当部署（者）がそっくり入れ替わってしまうと、それらの継承が危うくなりかねません。一方で、目的が不明瞭なまま漠然と継続されていたり、煩雑な作業等が漫然と実施され続けてきたりしている場合もないとはいえず、それらを是正した上で再開する良い機会ともいえます。

もちろん、人が変わるだけで業務が滞るような組織であってはならないことは言うまでもありませんが、新たな任務が増加しつつある中、業務等を効率的に実施するには、業務の見直しは欠かせません。この際、最も重要なのは「どこを」「どの程度」削減・追加すればよいかを適切に判断することです。そのためには新たなニーズ・手法に精通するとともに、過去に対する十分な理解（何が目的で、何が良くて、何が問題だったか）が求められます。大胆に見直しを実施するという意味では『温故知新』も大切ですが、『吐故納新』の方が、今の時勢にはより即していると感じます。

今回のコロナ禍では社会的全体でも大きく変わったことが多々あります。当院でも、これをよい機会と捉え、病院の事業・業務等を、教訓を生かしつつ、かつ、過去にとらわれ過ぎることなく新たな風を取り入れ、果敢に『あるべき姿の追求』に邁進する所存です。

新着任副院長挨拶



副院長
一等陸佐 吉積 司

令和四年三月、自衛隊福岡病院の副院長に着任しました吉積と申します。福岡病院での勤務は、今回で四回目となり、前回は平成十六年でしたので、約十七年ぶりとなります。病院や駐屯地の雰囲気はほとんど変わらないのでとても懐かしく感じています。

これまで、福岡病院をはじめ全国の自衛隊病院で勤務し、また海外派遣（イラク）や多くの災害派遣活動にも従事しました。特に地震災害では、東日本大震災（平成二十三年三月）、熊本地震（平成二十八年四月）、北海道東部胆振地震（平成三十年九月）において、当時勤務地で被災を受けながら、医療に関する様々な災害支援活動を行うなど貴重な経験をしました。

自衛隊福岡病院は、北部九州の隊員・家族の診療・健康管理のみならず、地域医療にも大きく貢献し、また二年前から続く新型コロナウイルス感染症への様々な対応にも取り組んでいます。歴史ある病院の一員として勤務できることは無上の喜びであり、これまでの経験を活かして病院・地域のために貢献したいと思っております。よろしくお願ひ申し上げます。

患者空輸訓練

四月二十二日（金）、目達原駐屯地において、西部方面航空隊の支援を受け患者空輸訓練を実施しました。

本訓練においては、航空機の特長である騒音及び風圧下での指揮・通信に留意した患者搭載・卸下及び機内における救護訓練について実施しました。

航空隊隊員から安全教育及び担架取付け装置の操作要領等についての説明、担架班における手信号を用いた患者搭載・卸下の反復演練、添乗救護員によるホワイトボード及び筒を用いた患者とのコミュニケーション等工夫を凝らした機内救護を実施し、患者空輸時における対応能力向上を図ることができました。



新着診療科内部長



先任診療科部長
森西 1 佐

診療科が一枚岩となるよう尽力致します。



歯科部長
大野 2 佐

福岡病院勤務は初めてです。よろしくお願ひします

心突然死対策講習会

一月十四日（金）・十五日（土）の二日間、防衛医科大学校から講師の派遣を受け、令和三年度心突然死対策講習会を実施しました。八個部隊から医官、看護官、救急救命士等四十七名の参加者に対し、心突然死に関する救急救命処置の知識と技能を修得させ、救命率の向上を図りました。



卒業式

准看護学院（学院長・山元二佐）は、三月一日（火）、川口病院長の立会の下、卒業式を挙行了しました。

第四十五期学生二十二名は、多くの病院関係者に見送られ、北は北海道から南は沖縄の各部隊及び救急救命士課程へ巣立って行きました。

尚、三月十一日、福岡県准看護師資格試験の結果発表があり、全員が合格しました。



入校式

准看護学院（学院長・山元二佐）は、四月一日（金）、川口病院長の立会の下、入校式を挙行了しました。

第四十七期学生三十三名は、准看護師である衛生救護陸曹を目指し、大きな期待を胸に全国から集まりました。

学院長の「自ら考え、個として自立せよ」という要望事項を胸に、これからの二年間、准看護師資格取得を目指し、勉学に励んでいきます。

学院長の「自ら考え、個として自立せよ」という要望事項を胸に、これからの二年間、准看護師資格取得を目指し、勉学に励んでいきます。



定年退官者等の紹介

《一月十一日付》	三等陸佐	泉 幸二
《一月十四日付》	三等陸尉	梅崎 慶弘
《二月二十二日付》	三等陸佐	二又 啓光
《三月十一日付》	三等陸尉	大我 伸一
《三月十四日付》	陸 准尉	大石 健一
《三月十七日付》	陸 将補	大川 貴司
《三月三十一日付》	行（二）四	井口 信昭
	行（二）四	森田 篤
	行（二）四	小崎 謙治
	行（二）三	黒岩 高弘
《四月六日付》	三等陸佐	山下 恵

人事往来

〈転出者〉

《三月十四日付》	建替準備室	陸 曹長	上村 大輔
（総務部）	（総務課）	一等陸曹	内田 孝広
		一等陸曹	用松 秀朗
（管理課）	陸 曹長	杉田 伸一郎	大賀 憲太郎
（医事課）	二等陸曹	酒見 圭典	野澤 浩
診療科	二等陸佐	森田 亘	岩本 勇氣
	三等陸佐	森田 亘	岩本 勇氣
	一等陸尉	森田 亘	岩本 勇氣
	一等陸曹	岩本 勇氣	岩本 勇氣
診療技術部	研究検査課	一等陸尉	柏原 茂
		岡本 清	岡本 清
衛生資材部	（衛生資材課）	一等陸尉	時本 将行
		佐野 恵	佐野 恵
看護部	二等陸尉	深尾 沙映	深尾 沙映
	二等陸尉	吉松 知紗	吉松 知紗
	二等陸尉	西田 成秀	西田 成秀
	三等陸尉	河野 茂由	河野 茂由
	三等陸尉	本田 麗華	本田 麗華
	二等陸曹	末岡 明	末岡 明
准看護学院	准 陸尉	山中 和幸	山中 和幸
（総務部）	（総務課）	行（一）四	平野 克也

〈転入者〉

《三月十四日付》	建替準備室	渡辺 正徳	渡辺 正徳
（管理課）	（管理課）	陸 曹長	中野 吉晴
		陸 曹長	中野 吉晴
（総務部）	（総務課）	一等陸尉	松田 一平
		二等陸尉	中野 功
		陸 曹長	奥村 耕二
		一等陸曹	氏田 喜治
		二等陸曹	吉住 裕亮
（管理課）	陸 曹長	櫻庭 泰広	櫻庭 泰広
	一等陸曹	倉野尾 潤平	倉野尾 潤平
	二等陸曹	友田 祐樹	友田 祐樹
（会計課）	（会計課）	一等陸尉	田中 英夫
（医事課）	（医事課）	二等陸曹	篠崎 弘子
		小園 英樹	小園 英樹
診療科	二等陸佐	大野 毅	大野 毅
	陸 曹長	奥菌 匡俊	奥菌 匡俊
	二等陸曹	小笠原 隼人	小笠原 隼人
	医（一）三	三浦 尚美	三浦 尚美
診療技術部	（放射線技術課）	貫 林太郎	貫 林太郎
		塚元 一吉	塚元 一吉
	医（一）二	阿南 郁子	阿南 郁子
（研究検査課）	（研究検査課）	三等陸佐	和才 新一
		一等陸曹	白井 正教
衛生資材部	（薬劑課）	一等陸尉	荻野 信平

看護部

《三月十七日付》	副院長兼企画室長	吉積 司	吉積 司
（総務部）	（総務課）	行（一）三	加藤 健二
衛生資材部	（衛生資材課）	三等陸佐	片桐 彰男
（管理課）	（管理課）	行（一）三	山津 輝子
		行（一）四	堤 俊之
		寺田 健	寺田 健
《四月一日》	（管理課）	行（一）三	松尾 好博
		行（一）一	安田 拓末
		行（一）三	森田 篤
		行（一）三	小崎 謙治
		行（一）二	古屋 忠
		行（一）二	小野 敬介

〈新規採用者〉